

途上国の森林保全や温室効果ガス排出削減の取り組みの成果に対して、先進国が経済的な見返りを提供する仕組みだ。

現在、REDD+実施に向けて、国レベルで各種データや制度を整えられつつあり、これと整合性を取るかたちで、西カリマンタン州などでも州レベルの実施メカニズムの構築が進められている。

「かこ罫やカスミ網、カメラトラップなどのさまざまな手法を使い、園内で小型哺乳類や鳥類、両生類、爬虫類などの生き物の種類や個体数を記録する方法を伝えています。職員はみな真剣で、今年5月に実施した最後の実習時には、独力で調査ができるまでになりました」と、小林さんは職員らの成長に手応えを感じている。

また、昨年11月には日本での研修も実施。グヌンパルン国立公園

念されている。

国連食糧農業機関（FAO）の推計によると、インドネシアでは、1990〜2000年の間に年間平均191万ヘクタールの森林が失われた。その後、森林減少のスピードはやや鈍化したものの、依然として大量の熱帯林が伐採され続けている。

中でも、対策が遅れているのがカリマンタン島の西カリマンタン州だ。同州では、開発や森林火災などによって、オランウータンやテングザルなどの希少種の生息地が減っているという。

「これらの大型の動物については、現地政府やさまざまな国際組織が保護活動を進めています。小・中型の哺乳類や鳥類、魚類、昆虫類などは、生物多様性を議論する上で重要な基礎的なデータがそろっていない状況です」。そう話すのは、西カリマンタン州の森林減少の抑制や関連制度の整備を

支援するJICAプロジェクトの小林浩専門家だ。1989年から青年海外協力隊員として4年間、1994年からJICA専門家として3年間、インドネシアで鳥類の調査を指導した経験を持つ小林さんは、今回、再びこの地で同様の調査に携わる喜びをかみしめている。

プロジェクトでは、生物多様性の維持・改善に向けたさまざまな取り組みを行っているが、それらは活動の一部に過ぎない。プロジェクトの最終的な狙いは、西カリマンタン州などの地域が、森林保全と温室効果ガスの削減を促進する仕組みである「REDD+」を実施できる体制を整えることだ。

REDD+は、2007年の国連気候変動枠組条約第13回締約国会議（COP13）で提唱されたもので、開発

途上国の森林保全や温室効果ガス排出削減の取り組みの成果に対して、先進国が経済的な見返りを提供する仕組みだ。

現在、REDD+実施に向けて、国レベルで各種データや制度を整えられつつあり、これと整合性を取るかたちで、西カリマンタン州などでも州レベルの実施メカニズムの構築が進められている。

グヌンパルン国立公園の森。木の上ではテングザルが休憩中だ

生物多様性の宝庫で進む森林開発

国土の陸地面積の約半分が森林に覆われているインドネシアには、世界の野生動物植物種のおよそ

20パーセントが生息している。しかし、1970年代に大規模な森林開発が始まってから、動物たちはすみかを追われるようになってきた。さらに、温室効果ガスの放出による地球温暖化への悪影響も懸



採集した魚類を計測するグヌンパルン国立公園の職員。こうした計測にも経験が必要だ。数をこなしながら技術を身に付けていく

念されている。

国連食糧農業機関（FAO）の推計によると、インドネシアでは、1990〜2000年の間に年間平均191万ヘクタールの森林が失われた。その後、森林減少のスピードはやや鈍化したものの、依然として大量の熱帯林が伐採され続けている。

中でも、対策が遅れているのがカリマンタン島の西カリマンタン州だ。同州では、開発や森林火災などによって、オランウータンやテングザルなどの希少種の生息地が減っているという。

「これらの大型の動物については、現地政府やさまざまな国際組織が保護活動を進めています。小・中型の哺乳類や鳥類、魚類、昆虫類などは、生物多様性を議論する上で重要な基礎的なデータがそろっていない状況です」。そう話すのは、西カリマンタン州の森林減少の抑制や関連制度の整備を

支援するJICAプロジェクトの小林浩専門家だ。1989年から青年海外協力隊員として4年間、1994年からJICA専門家として3年間、インドネシアで鳥類の調査を指導した経験を持つ小林さんは、今回、再びこの地で同様の調査に携わる喜びをかみしめている。

プロジェクトでは、生物多様性の維持・改善に向けたさまざまな取り組みを行っているが、それらは活動の一部に過ぎない。プロジェクトの最終的な狙いは、西カリマンタン州などの地域が、森林保全と温室効果ガスの削減を促進する仕組みである「REDD+」を実施できる体制を整えることだ。

REDD+は、2007年の国連気候変動枠組条約第13回締約国会議（COP13）で提唱されたもので、開発

途上国の森林保全や温室効果ガス排出削減の取り組みの成果に対して、先進国が経済的な見返りを提供する仕組みだ。

現在、REDD+実施に向けて、国レベルで各種データや制度を整えられつつあり、これと整合性を取るかたちで、西カリマンタン州などでも州レベルの実施メカニズムの構築が進められている。

グヌンパルン国立公園の森。木の上ではテングザルが休憩中だ

途上国の森林保全や温室効果ガス排出削減の取り組みの成果に対して、先進国が経済的な見返りを提供する仕組みだ。

現在、REDD+実施に向けて、国レベルで各種データや制度を整えられつつあり、これと整合性を取るかたちで、西カリマンタン州などでも州レベルの実施メカニズムの構築が進められている。

念されている。

国連食糧農業機関（FAO）の推計によると、インドネシアでは、1990〜2000年の間に年間平均191万ヘクタールの森林が失われた。その後、森林減少のスピードはやや鈍化したものの、依然として大量の熱帯林が伐採され続けている。

中でも、対策が遅れているのがカリマンタン島の西カリマンタン州だ。同州では、開発や森林火災などによって、オランウータンやテングザルなどの希少種の生息地が減っているという。

「これらの大型の動物については、現地政府やさまざまな国際組織が保護活動を進めています。小・中型の哺乳類や鳥類、魚類、昆虫類などは、生物多様性を議論する上で重要な基礎的なデータがそろっていない状況です」。そう話すのは、西カリマンタン州の森林減少の抑制や関連制度の整備を

支援するJICAプロジェクトの小林浩専門家だ。1989年から青年海外協力隊員として4年間、1994年からJICA専門家として3年間、インドネシアで鳥類の調査を指導した経験を持つ小林さんは、今回、再びこの地で同様の調査に携わる喜びをかみしめている。

プロジェクトでは、生物多様性の維持・改善に向けたさまざまな取り組みを行っているが、それらは活動の一部に過ぎない。プロジェクトの最終的な狙いは、西カリマンタン州などの地域が、森林保全と温室効果ガスの削減を促進する仕組みである「REDD+」を実施できる体制を整えることだ。

REDD+は、2007年の国連気候変動枠組条約第13回締約国会議（COP13）で提唱されたもので、開発

途上国の森林保全や温室効果ガス排出削減の取り組みの成果に対して、先進国が経済的な見返りを提供する仕組みだ。

現在、REDD+実施に向けて、国レベルで各種データや制度を整えられつつあり、これと整合性を取るかたちで、西カリマンタン州などでも州レベルの実施メカニズムの構築が進められている。

グヌンパルン国立公園の森。木の上ではテングザルが休憩中だ

森の命を守る、輝かせ続ける

広大な森林を持つインドネシアには、数多くの生物が息づいている。しかし、森林開発に伴って、生物のすみかは減りつつある。生物多様性を守るため、カリマンタン島・西カリマンタン州の国立公園では、生態系管理に関する能力を強化する取り組みが行われている。



西カリマンタン州

インドネシア
From Indonesia